

三井環メールマガジン —— 法務検察の闇を斬る

2012年 4月 1日 Vol.0049

「最高権力」検察をどうすれば変えられるのか ③

■ 検察の罪を助長したマスメディアの罪 ■

篠田:

最近では検察批判とあわせてメディア批判が付いてくるんですが、一般市民の間でこれだけ批判の声が高まっているのにメディアが対応できてないのはすごく大きな問題だと思うんです。『創』1月号で北海道新聞の高田昌幸さんの手記を載せました。6~7年前に、警察の裏金批判のキャンペーンが吹き荒れた時、北海道新聞はその急先鋒で、高田さんはそのキャンペーンのデスクだったんですね。キャップの佐藤一さんと北海道警を徹底追及して、新聞協会賞をもらった。みんなが拍手かっさいでしたよね。ところが、その後どうなったかと言うと、警察側からもものすごい報復を受けて、高田さんたちは飛ばされた。今、高田さんたちは道警の人間に起訴されているのですが、これもメディア界で誰もフォローしてあげない。本当にジャーナリズム界が何とかしないとどうしようもない感じですね。

青木:

それはもちろんですが、警察、検察と言うのはやっぱり、本当に怖い権力装置だということも強調しなければなりません。検察が独自捜査をすることは刑事訴訟法で認められていて問題はないんですが裏金の話でつくづく思う、のは公訴権を独占しているうえに、捜査権も持っている検察組織の権力は強大に過ぎます。これは怖いですよ。

裏金告発をした警察官は現役もOBもいっぱいいましたが、さすがに逮捕まではしなかった。しかし、三井さんは一発逮捕です。なぜ警察ができないかという、おそらくそのような話を検察に持っていけば、検察が認めないからです。

検察にしても警察にしても、極めて問題の多い権力機関同士ですが、組織が

別であれば、一定程度の抑止力、チェック機能は働く。ところが検察は捜査権も持っていて、逮捕もできて、公訴権も独占している。その上、裁判も検察の言いなりで、起訴すれば99%以上が有罪です。つまり「万能」の権力装置であり、メンツをかけてやればほぼ有罪になるとなれば暴走しますよ。

メディアの話ですが、これは難しいですね。僕の大きな問題意識は、日本の大手メディアは「事件報道過多」なんです。その上、今の日本のメディアにおける「事件報道」とは「捜査当局報道」ですからね。検察・警察の幹部にいかにして食い込み、明日検察が何をするか、明日警察が何をするかを報じることが最大の価値があるということになってしまっている。つまり、検察・警察に嫌われるということは基本的に大手メディアはできない。検察・警察の不祥事は構造的腐敗ばかりを嗅ぎ回っている記者は社内で煙たがられてしまう傾向が強いんです。やはり「捜査当局報道」の過多がメディア最大の病理であり、その土壌として記者クラブとしての問題も横たわっていると思います。

安田：

僕は道新の高田さんと佐藤さんの代理人なんです。正確に申し上げたいのですが、高田さんはキャップとして、佐藤さんはそのサブキャップとして調査報道をし、北海道警察の組織的な横領事件を告発したんです。ニセ領収書を使って、自分たちの送別費、飲食費に使っていたことを告発していわけです。

そうして、一旦は、彼らは勝ったんです。道警の元幹部たちは着服を認めて2億円あまりを返還したんです。実際はその程度の額ではないんですがね。それで落ち着いたんですが、ところがそのしっぺ返しとして、その後、道新が警察出入り禁止状態になり、警察ネタを取れなくなったんです。それで当時の公安出身の佐々木総務部長が退職した後、道新と高田さんと佐藤さんの3人を名誉棄損だと訴えるんです。高田さんたちが書いた本の中身が嘘だ、名誉棄損だと訴えたのです。ところが道新を訴えたのには裏がありまして、道新は佐々木元道警総務部長と手を打とうとするんです。「佐々木さん道新の顧問になってください」とか「裁判が起こされたならば、非を認めます」出来レースをしようとするんですね。もちろん、そのようなことは、高田さんと佐藤さんは知らないんです。

そして、佐々木氏から実際に裁判が起こされるんですが、その裏取引があったという話を聞かされて「これは許せん」と頑張ったのが大谷昭宏と宮崎学なんです。この二人が裁判に割って入って、手打ちをさせたんです。

ところが道警が「話が違うではないか」と佐々木氏が道新の幹部たちと話している内容を録音していた中身を暴露するわけです。ところが新聞記者の悲しいところですが、本の中身に関して名誉棄損だと訴えられたのですが、新聞記者は取材源を明らかにできないんです。取材源を明らかにできない以上、裁判では負けてしまうわけです。真実であると信じるに足る理由があるということ立証ができない。結局、敗訴にならざるを得ないんです。

中身は、佐藤さんたちが、道警の佐々木総務部長が北海道庁に圧力をかけて、道議会で道警問題を取り上げさせないようにしたということを暴露したのですが、これもとで、佐々木氏が当時の本部長から「なにを下手を打ってるんだ」叱責されたということを書籍に書いたのですが、これが事実無根で佐々木氏の名誉傷つけるものだというのです。

この裁判では、道警が全面的に協力するんですね、当時の総務課の職員ら全員がその場やその場付近にいて、「佐々木総務部長が道警本部長からしかられたことを聞いたことはありません」と言うんです。こちら側は誰から聞いたという取材を明らかにすることができないから、結局負けるんです。

高田さんは社会部にいたんですが国際部に飛ばされて、今は運動部のデスクですからね。サッカーや野球の記事をチェックしている。社会部の生え抜きでイカも新聞協会賞までもらった彼が、なんでやと言いたくなりますよね。

現場の記者、しかも告発した記者がものすごい危機に陥っているわけです。名誉棄損で裁判に訴えられ、損害賠償まで払わされようとしているわけです。しかし、それに対して全国の記者が報道すらしてくれない。悲しい状況ですよ。

■ 法務検察と一体化した大手マスコミ ■

篠田：

ジャーナリズムの組織は個人を守るために本来あるべきものなのに、組織防衛が第一になって、個人を犠牲にしていくわけですね。だから気をつけないと権力批判をした人だけが狙い撃ちされることになります。

青木：

僕は大手の通社にいたんですが、良心的だったはずの新聞社が組織防衛となるところになってしまうというのは、やはり極めて日本的というか、組織の病理みたいなものをすごく感じます。高田さんたちはあの報道で新聞協会賞まで取っているんです。新聞協会賞とは新聞業界の集まりである新聞協会が「1年の中で一番いいスクープだった」と認めた賞ですから、いくら新聞界に問題が多いとは言っても、そうしたスクープを評価する意識はあるわけです。ところが警察に裏から手を回され、脅しをかけられると腰抜けになってしまう。情けないですよ。かつて来ワシントンポストがウォーターゲート事件を暴いた際、社主が「社屋を売り払ってでも報道を続ける」と言ったそうですが、果敢な調査報道を続けた記者を守れないという新聞社は本当に情けない。でもそれが現実です。

三井：

結局大手メディア、司法記者クラブに所属しているメディアですが、マスコミと、法務検察が一体になっているんですよ。だから法務検察の批判を書けないんですよ。そこが大きな問題です。さっき青木さんが言われたように、現場の記者はそれをやりたいんです。しかし上に行くときできない。NHKは

私の裏金問題の「う」も報道してないんです。あんなところ視聴するのはやめなさい(会場笑い)。それから大手マスコミも買う必要ありません。真実を伝えないんだから。それくらいやらないと大手マスコミの体質は治らないと思います

(2010年新宿ロフトプラスワンにて 検察批判を続ける当事者たちの議論会)

月刊『創』2011年2月号より 終わり

—
著者: 三井環(元大阪高検公安部長)

公式Web: <http://www.solidarite.jp/>

登録/配信中止はこちら: <https://foomii.com/mypage/>
